



職場単位の持ち寄り読書から 組合員との対話運動へ



佐野 嘉彦

香川県 JA香川県 総務部組合員課 課長

さの・よしひこ／平成8年JA高松東部（当時）に入組。平成10年からJA高松市中央（事業譲渡）で電器業務を担当。平成12年JA香川県設立後は、営農センター経済部で電器業務にあたる。平成23年営農センターの営農管理課で広報委員を担当。平成24年からは総務部組織広報課で広報業務を担当。令和3年には組織再編により総合企画部広報グループで広報業務を担当（課長補佐）。令和6年から総務部組合員課に配属。令和7年から現職。

JA香川県は組織基盤強化の方策として、組合員への「一日訪問」を長年にわたり実施。組合員の生の声を聴き、ニーズの把握や「わが農協」意識の醸成をめざしています。さらに職員の対話力向上策として毎月全部署で行っているのが、『家の光』持ち寄り読書です。農業や協同組合に関する知識を職場の仲間と共有し、組合員や地域住民に伝えることに役立っています。JAの組合員課がすすめる組合員・職員双方への教育文化活動の具体的な方策と必要性について、佐野課長に聞きました。

■ JA 電器業務と広報業務で、組合員の声を聴く

——佐野課長は、入組して10年以上にわたって電器業務に携わってきました。具体的にどのような仕事をされてきましたか。

具体的には、電器製品の販売や修理、取付、電気工事などの仕事です。わかりやすく言うと、「まちの電気屋さん」のようなイメージでしょうか。

組合員と直接関わる業務だったことから、業務に対する反応を直に感じるこ

ができました。とくに、故障した電気製品の修理がすぐにできたときには喜んでいただいたり、電気工事が希望どおりにできたときにも満足していただいたりしました。そのときに、「ありがとう」とお声がけいただいたことはよく覚えています。担当地域は限定的ですが、電器業務を通じて多くの組合員とのつながりもできたと思っています。

——その後、一転して広報業務に携わるようになりました。広報の仕事をとおしてやりがいを感じたことは、どんなことですか。

広報業務では、毎月発行の広報誌「きらり」を担当しました。取材することも初めての経験で、記事の作成や写真の撮影など基本的な技術の習得にも苦労したことを覚えています。当時の広報誌は、計28ページでメイン企画が3つありました。企画立案し、取材の段取りをすることはなかなか難しく、慣れるまでにはかなりの月日がかかりました。

取材テーマは、J A事業や農業の話題、旬の農産物などでした。組合員をクローズアップする人物取材が楽しかったことを覚えています。例えば、新規就農者の農業に対する思いや就農の経緯、今後の夢などを直接聞くことができたのはありがたい経験でした。また、当時は子どもが登場する企画もあり、毎月企画を考え、子どもの出演を手配していました。農業体験と料理をして食べることなどを組み合わせ、誌面づくりに合わせて、参加した子どもに喜んでもらうことにも心を砕きました。

広報業務でも、人とのつながりを多くつくることができました。広報には文字どおり、伝えるという役割があり、いかに組合員にわかりやすく伝えていくか、いかに多くの人に読んでもらえるように発信していくかを常に考えました。企画立案のさいには「だれに、どう届けるか」といった目的設定の大切さも学ぶことができました。



J Aの広報誌「きらり」。特集記事のほか、「きらり 耕し人訪問」や「旬解剖！ かがわの農産物図鑑」「女性部だより」などのコーナーがある

■ 准組合員の意思反映・運営参画をめざす

——広報業務を通じて組合員と深く話をする機会が増え、さらに昨年からは組合員課に配属になりました。組合員との接点づくり、関係強化に向けて、実施して

いる取り組みを教えてください。

准組合員を農業の応援団として位置づけ、地域農業やＪＡへの理解を深めるために准組合員との関係づくりに力を入れています。

平成29年度から、統括店ごとに准組合員を募集して、准組合員との交流会（約20名の参加）を開催し、農産物直売所・集荷場などの視察や収穫体験をしてもらいました。さらに、ＪＡ役員との意見交換会を実施し、ＪＡに対する意見や要望を直接聞くことができました。

令和4年度からは、准組合員の意思反映や運営参画をはかることを目的に、「パートナーズクラブ」を設置。毎年、准組合員を対象に募集し、協同組合やＪＡの説明、施設見学、農業体験などを年2回行うほかに、最終日にＪＡへの提言書を作成し、理事長の前で発表するという内容です。グループごとに作成する提言書は、ＪＡ（ふれあい）まつりに若い人を呼び込む方策や、体験農園



三豊地区でのＪＡふれあいまつり。職員と組合員らによる支店協同活動で地域の活性化に取り組んでいる



パートナークラブで准組合員との意見交換。今年度から組織強化に向けて継続的な活動を実施している



営農指導付きの貸し農園「讀さんファーム」での農業体験が准組合員や地域住民に好評

の魅力的な内容の提案、「一日訪問」で面談できない場合のＳＮＳ対策など、バラエティーに富んだテーマが盛り込まれています。一人ひとりが真剣に考えていただいた貴重な提言となっています。

試行期間を経て、今年度からは参加対象者を、過去の「パートナーズクラブ」参加者とし、順次「准組合員との交流会」参加者から集うこととしました。「准組合員との交流会」を「知る・学ぶフェーズ」、「パートナーズクラブ」を「意思反映フェーズ」と位置づけ、ステップアップするイメージをつくるのがねらいです。参加者には、身近なLINEを活用し、公式LINEによるＪＡイベントや旬の情報などを定期的に発信

しています。

将来的には、准組合員の意思反映・運営参画をめざした「参加型組織」として、そのあり方を段階的に発展させていくことをめざします。他の准組合員を引っ張っていくようなリーダーを育成していきたいと考えています。活動内容を職員といっしょに企画・立案する段階へ順次進め、参加者の主体性を育み、現場の一体感を醸成し、組織としての自立をはかっていきます。

■🔥「わが農協」意識を高める訪問活動

——一方、正組合員には「一日訪問」を実施して対話運動を展開されています。合併以降25年以上の取り組みになりますが、その目的と成果を教えてください。

対面で組合員の声を聴き、相互理解を深めることが目的です。それによって組合員の一層の意思反映や運営参画を進め、「わが農協」意識の醸成をはかっていきたいと考えています。

次の6つの項目を重点に、一日訪問に取り組むこととしています。

- ・組合員とのフェイスtoフェイスの信頼関係を構築する。
- ・事業活動の情報を発信し、組合員との理解を深める。
- ・対話により、組合員の声を把握し、事業改善等に活かす。
- ・イベントやくらしの活動などへの参加を勧める。
- ・組合員のニーズを発掘し、事業利用拡大につなげる。
- ・対話・提案力の向上や農業協同組合運動の理解を深めることにより職員の人材育成を行う。

この訪問活動は、平日の日中に行うため、働きに出ている家庭などもあって、会えない場面も多くあります。面談率を毎月調査していますが、令和6年度の面談率は58.8%。6割弱の組合員と面談できている状況です。今後、面談率の向上をさせる仕組みの構築が課題となっています。職員にはeラーニングで訪問日の理解度テストを実施し、目的や誤配付防止などについて繰り返し学び、面談の重要性を理解してもらうようにしています。



一日訪問では『家の光』記事を話題にすることも。職員のお気に入りの記事もさまざま

■🔥 職場単位の読書会で対話力向上へ

——組合員との対話運動を有意義なものにするためには、職員のコミュニケー

ション能力を高める必要があります。その方策の一つとして、『家の光』を使った持ち寄り読書を職場単位で行っています。概要を教えてください。

平成29年5月から、各部署で毎月のコンプライアンス研修会で、『家の光』持ち寄り読書を併せて行っています。当時、農業・JA自己改革において、マスコミによって事実と異なる情報が多く流されていました。そこで、農業や協同組合に関して、正しい情報を職場の仲間と共有し、組合員や地域住民に伝え、JA運動の理解醸成につなげていこうと、全部署で毎月、取り組んでいます。組合員課が主管部署となります。

共通のテーマ(読む記事)を設定して、部署ごとにその月の担当者が朗読(長文の場合はポイントを絞って)し、読んだ後、自分の意見を述べ、必要に応じて話し合っています。私の部署では、9月には『家の光』9月号の記事「ひと目でわかる! 食と農のいま 第1回 食料自給率の低さが際だつ日本」(P148~)を活用しました。担当者が朗読の



組合員課での持ち寄り読書。『家の光』記事の感想や意見を率直に出し合って、和やかに会話が弾む

後、なぜこの記事ピックアップしたのかを伝え、その後、少し話し合いの時間を設けます。ある課員はイギリスでは戦後の農業政策で自給率のアップを実現しているのに対し、日本は60年以上下がり続けていることの問題について指摘し、他の課員からは農家をリスペクトする土壌をつくるのが大切だという意見などがありました。また、イラストを大きく使って、各国の食料事情がわかりやすく伝わっているという感想もありました。

話し合った内容は、日時や討議テーマ、話し合った内容などを記録し、組合員課に報告することとなっています。さらに、職場内広報誌「みらい」に取り組み内容等を紹介し、情報共有しています。

毎月の読書会の開催によって、一日訪問のさいに組合員とのコミュニケーションがとりやすくなったという声も聞きます。農業やJAの話題はもちろん、料理や手芸、健康などの身近な記事の情報を、職員から組合員に伝えることによって会話が弾み、さらにJAに親しみを感じてもらえたらと思っています。

——准組合員との関係づくりや一日訪問、持ち寄り読書などの取り組みは、JAファンづくり、組織基盤強化につながる取り組みです。最後に、教育文化プラン

ナーとして、日々の業務で大切にしていること、心がけていることを教えてください。

J A香川県では、教育文化プランナーを本店だけでなく統括店ごとに配置しています。定期的にプランナーの合同研修会を実施して、教育文化活動の重要性や具体的な方策を学んでいます。プランナー同士で学び合い、情報交換しながら、協同活動の仲間づくりを広げていきたいと思っています。

どんな仕事も同じだと思いますが、しっかりと目的をもって業務にあたっていくことが大切です。「教育文化活動とは何か」「何をだれに伝えたいか」を考えること。また、相手に届くような情報発信の工夫を心がけています。農業・J Aを取り巻く環境は年々変化しています。常に対話でニーズを集め、それに応えていく。そのためには教育文化活動が必要不可欠だと考えています。